研究ノート

宮川ひろの未発表作品「春駒」について

――解題と本文紹介（二）――

中地文*
大木葉子**

要旨

日本の現代児童文学作家宮川ひろは、代表作『春駒のうた』刊行以前に、同じ題材での試作を繰り返したと語っている。今回、『春駒のうた』につながる最初期の作品とみられる未発表作品「春駒」の原稿を確認する機会を得た。これは、宮川ひろのご子息宮川健郎氏が保管しているものである。本稿では、前稿に引き続き、未発表作品「春駒」の第三章から第五章までの本文紹介を行うとともに、推敲過程を明らかにした。

キーワード：宮川ひろ、児童文学、「春駒」、『春駒のうた』

本稿は、「宮川ひろの未発作品「春駒」について――解題と本文紹介（一）――」（『宮城教育大学紀要』第五六巻、二〇二二年一月）の続稿である。前稿では、未発表作品「春駒」について、宮川ひろ自身の発言と現存稿の状態の確認をしたうえで、その時点で所在が明らかになっていた現存稿全一三三枚中六六枚目まで（作品第二章まで）の本文と推敲過程を紹介した。その続きとして今回は、現存稿の六七枚目（原稿用紙上部欄外に付されたページの「No.64」）から一三三枚目（同「No.130」）までに記された、作品第三章「誕生日」から第五章「母の死」までの本文とその推敲状況を紹介する。本文決定の方針は、次のとおりであり、本文には推敲の最終段階を示した。

(1) 本文の表記、仮名遣い等は、原則として原文どおりとする。

(2) 漢字は、原稿では正字・俗字、旧漢字・新漢字が混用されているが、意図的な使い分けと判断できる場合をのぞいて、常用漢字の字体に統一する。

(3) 誤字・脱字等は、ママと注記してそのまま記す。昭和初期の慣用表記と考えられるなど、必ずしも誤りとはいえないものも、用字・表記が今日の通常のものとは異なる場合は、ママと注記して記す。

(4) 拗促音は、原稿では使用に不統一が見られるが、意図して使い分けていると考えられる場合を除いて、小書きに統一する。

(5) 送り仮名は作者の記したとおりとする。

＊　宮城教育大学　教員養成学系　教科内容学域　人文・社会科学部門（国文学）
＊＊　東北工業大学

(6) 句読点は、書き癖で句点か読点か不明確なものが多いが、明確に判断できる場合を除き、文脈にそくして判断して記す。
(7) 字下げ、行あけ等の指定は、原文どおりとする。
(8) ルビは、作者自身が付したものを、付したとおりに示す。文字を記さずに空欄にルビだけ付している場合（後から漢字を入れる予定だったと考えられる部分）は、空欄を□で示し、□にルビを付した。

五　未発表草稿「春駒」の本文紹介（二）

誕生日

「一年はね、花サカヂヂイのところを開いてお帳面にきれいに書取りましょう。二年と三年は読方の一番はじめから漢字だけ拾って書取り練習ね、後でお帳面を見せていただきますから一生懸命お稽古してちょうだい」
人数は少くても四学年を一つの教室に集めてそれ〴〵に違った学習をさせなければならない単式学級の授業にも漸く馴れた三学期も半ばの頃――。此の時間は四年生を主にして授業を進めてゆく予定の木村先生は三年までの子供に仕事を言いつけておいて一番廊下に近い四年生の列の前の黒板に

誕生日に人を招く

と招待文を扱っている教材の表題を大きく板書した。木村先生は仲々達筆である。女学校時代にもお習字は級で一番うまかったのだけれど紙の上に書くのと違って黒板に白墨で書く字は木村先生の自信を裏切って思う様に書けなかった。其の上早く書かなければならない、しゃべり乍ら書くこともある、子供の方へ顔を向けたままの姿勢で書かなければならないこともある。遠く離れて見るとその不調和は一層目立って黒板一ぱいに書いた自分の板書を教字（ママ）の後から眺めて人知れず冷汗を流したこともあったけれど子供達はその字を下手だと言った事はなかった。先生の書く字は上手なものと固く信じて疑はない子供だからである。
末（ママ）だ白墨の粉に汚れていない朝の黒板に腕を伸してさら〳〵と大きく記したその表題は思いの外うまく書けた。新しい課へ進む喜びに静に黙読している子供の机の間を歩いて後へ行くと今書いた字を眺めて見た。教壇に立って漸く一年になろうとしてやっとそんな心のゆとりも出来たのである。離れて見てもやっぱりうまく書けていた。こんなに気持よく書けたことは今まで一度もなかったことである。学習態度の訓練もやっと出来て静に勉強出来る様になった五十人の子供の後に立って首を一寸右の方へ傾けてしみ〴〵と板書を眺め乍ら木村先生は思はず微笑んでいる。
「うまい！」
一瞬の沈黙を破って徳一が叫んだ
「うんまーい」
続いて貞治が同感の意を表した
「うんまいなあ、うんまいなあ」
男の子も女の子も三年も二年も教室中にガヤ〳〵と讃辞の声が起った。
「そおお　みんなもそう思う。先生もね今日はうまく書けたなって嬉しくなっていたのよ」
先生はそう言い乍ら大またに机の間を歩いて又教壇の上に上った
「ねえ、此の課が終るまで消さないでおきましょうか」
木村先生は又首をかしげて相談する様に言った。
「ハーイ」
「ハーイ」
賛成の意をどういう言葉であらはしたらよいのかわからない此の子供達は口々にそう答えることが精一ぱいの表現なのである
「じゃあこれ読める人」
四年生の殆んどが手を挙げたが三年生にも手を挙げている子もいた。こうした学級では授業が面白く進んで来ると四年生の話でも一年の授業でも皆が聞いてしまうのだけれど木村先生はそれを強くたしなめたり叱ったりはしなかった聞（ママ）いていれば何か覚えてくれるだろうと思ってである。
「誕生日ってどんな日？」
今度はは（ママ）一人も手が挙がらなかった
「あらお誕生日を知らないの？」
先生は意外だという表情で眼をくるっと廻した。すると貞治が低く自信なさそうにそっと手を挙げたけれどそれは指されては困るという様に又下されて

しまった。
「その位知っているでしょう」
言い乍ら呆れたという様にふっと□息をもらした様であった。
「先生、あの誕生なら知ってるけど、なあ」
と最後は友達に同意を求める様に周囲を見廻し乍ら貞治が言うとみんな一様に大きくこっくりと□ずいて見せた。
「誕生を知っているんなら其の日のことでしょう。貞治さん言ってごらんなさい」
「初っ子が餅を背負う日です」
もう木村先生はおかしさがこらえ切れなくなって教壇の端に立ったまま腰を折る様にして笑いころげているが子供は誰も笑はなかった。どうも話が変だぞと言った顔で眼をくりくりさせているだけである。先生は仲々止らない笑いをかみしめ乍ら
「誕生日ってね生れた日のことよ。だから誰にでも毎年巡って来る嬉しい日なのよ」と説明したけれど子供はいよ〳〵解らないと言った顔付なのである。すると八郎が
「先生　そいじゃあおらにも誕生日ってあるんですか」と聞き返した。八郎は八番目の子なのである
「ええ　誰だって誕生日のない人なんてありませんよ。例えばね今日生れた赤ん坊があるとすれば二月八日は毎年其の子の誕生日なんです」
「大人になってもですか」
「初っ子でなくってもですか」
だんだんと誕生日の意味がはっきりして来た様子である。此の子供達は物心ついてから一度も誕生日を祝って貰ったことのない者ばかりなのである。長男と長女だけは何処の家でもその誕生を祝ってお宮詣りもし満一年を過ぎた初誕生日にはあんぴん餅を□いてそれを五つ風呂敷に包んでやっと二足三足歩く様になった子供に背負はせ、つぶれずに立っていられたら発育の良い丈夫な子だと言って喜ぶならはしがあるのだが、此の初誕生日のことを「誕生」と言っているのである　そうした初誕生の祝をを(ママ)してもらってお母さんにおんぶして近親の家へ餅を配って歩いた長男や長女も何人かいるのだけれど覚えている筈はないし、まして八郎君に誕生日などあろう筈もなかった。こっそりと生れて半年近く名前もつけられず「八番目だから八郎でいいや」とやっと農閑期にはいって名前がつけられ戸籍が出来た始末だったから此の子供達の学籍簿にのっている生年月日も誠にあやしいものが多いのである。
「お誕生日のお祝に遊びにいらっしゃって下さいっておよびする手紙でしょう。そのつもりでもう一度読んでごらんなさい」。
誕生日。そんなのは遠い町の子だけにあることなのだと思って読んでいた子供達は「そうか俺達にも誕生日はあったのか」と言った顔で前よりは親しみ深いまなざしで小さな声を出してめい〳〵が読みはじめた。
生れて来たことを祝福されるでもなく、一年一年成長してゆく我が子の姿を喜ぶだけの心のゆとりもなく少しでも仕事の役に立つ日が早く来る様にという事だけを考えて育てられ誕生日も知らずに大きくなった子供達を前にして木村先生は天井の一角を見つめ乍ら誕生会のことを考えていた。
其の日の放課後、西陽の暖かく射し込む職員でストーブの燃え残りの火を取った火鉢の側で先生は楽しそうに何か書いていた。学籍簿を出して調べた生年月日を月別にして子供等の誕生日表を作ったのである。さし当って二月生れの子供を今週中に祝って上げたいけれどと数えたら五人あった。
「五人ね、毎月三人か五人、多くても七人だからわたしのお子使いで何か買って上げられないか知ら」　一人でつぶやき乍ら今月の予算とにらみ合はせて頭の中で計算している様子であった
「そうだわ十銭の筆位なら大丈夫」。
分教場の子供は四月に学年が進んだ時買って貰った一本の太筆を翌年の三月まで使うのである。家へ持って帰って書くという事など勿論ないのだけれどそれでも一週二時間の練習で三学期ともなれば筆の穂先は短くすり切れてしまって太さを加減することなど出来なくなってしまっているのだ。一年間の練習の効果を見ようと思っても「この筆ではねえ」と筆と文字とを見比べて□息をつき乍らも買っていただきなさいなどとうっかり言うことは出来ないのである。現金の収入の全く少ない家々の生活では十銭の筆一本でも買って貰えなどと言ったら「先生が無駄使いをしろって教えるだか」と大へんな見幕で怒るであろうことが木村先生にもわかって来ていたから筆を祝ってやろ

うと考えついたのである。
出来上った表を教室の後の壁に貼り帰り途についた木村先生は途中で本校の前の文房具屋へ立寄って五本の筆を求めると風呂敷の中へ包んで雪の道を我が家へと急いだ。こんなすてきな思い付きを早く木村さんに話したかったのである。生れて初めて誕生日を祝って貰う子供の顔を心の中に描き乍ら心は軽くはずんで何故もっと早くやって上げなかったのかしらと思うのだった。

「おっ母、誕生日っていうのは誰にだってあるだよ。お父っあんにだっておっ母にだって□にだって雪子にだってみんなにあるだよ」
貞治は戸口を入るなり靴も脱がない中にいきなりこんな事を言った。少しでも早く一大発見を母親にも教えて上げたかったのである
□□□端で縫物をしていた母親は其の手を休めもしないで
「そうさあ誕生日のねえ人なんてあるもんか。」
平然としていう母親の態度は貞治には誠に意外だった様である。
「あなんだおっ母知ってたんかい。おら今日はじめて先生に聞いた。誕生日って初っ子が餅を背負う日だって言ったら先生に笑はれちまった」
「あんぴん餅を貰う日だってか」
母と子は大きな声で笑った
「それでその日にゃあ赤飯をつくって仲のいい友達をよんでお祝いするもんだっちゅうよ」
「何もおこわをつくんなくったっていいだよ菓子でもうどんでも何でもいいじゃあねえか」
「おれの誕生日は三月十二日だからお祝してくんねえかなあ　そうしたら徳三と八郎をよぶだけえど」
「それじゃあ甘酒をつくって煮〆でも煮て祝ってやるべえよ」
「おっ母ほんとかい？　嬉しいなあ　ようしそいじゃあよび状を書くぞ」
「木村先生もよんだらいい」
「よびてえけどおべっか（おせじ）だって言はれるとやだからな」。

はじめて誕生日を知った子供達。

木村先生が祝ってやった誕生会をこの子供達がどれ程喜んだかわからなかった。そして毎月ずっと続けてやって下さる約束をしていたのに先生は四月から本校勤務になってしまったのである。一番がっかりしたのは雪子だった。四月から本当の一年生になって勉強出来ることをどんなに楽しみにしていたか知れなかったから二、三日はぐずっていてどうしても学校へ行くのはいやだと家中の者を手こずらせた。それは後任の先生が男の先生と聞いたからである。男の先生と聞いただけで雪子はあの雪だるまを叩きつけて叱った老先生の恐ろしい顔を思い出したからだった。「どうして木村先生は本校へなんか行っちまっただっぺい」雪子は黙りこくって先生のことばかり考えていた。泣いていたら、すねていたらびっくりしておっ母が木村先生を又分教場へ呼んで来てくれるかも知れない。ごはんもお八つも食べたくなかった。数え年八つになっ頭と体で精一ぱいの反抗を示したけれどそんなことが何の役に立つ筈もなかった。小さな子供の気持など考えても見ないで二、三の村の有志の感情だけで行はれな人事移動に対して村人は一言の批判も不平も言はうとはしないのだ。多くの小作百姓は何の権限もない、ましてそんな直接自己の得にも損にもならない様な事はどうでもよかった。それよりは雪の消えた山や畑へ出て働かなければ食えなくなると考えることの方が先で子供の声を聞いてやる親もいないし聞いてくれないと諦らめている子も亦語ろうとはしなかった
「決ってしまっただからいくら泣いたってしょうがねえだよ。五年になれば雪子だって本校へ行くだからそん時は又教えてもらえべえしさ」
母親も共に悲しみながら慰めるのだけれど四年も先のことを楽しみに我慢しろと言っても生れてから末だ七年足らずしか生きて来ていない子と五十に近い母親とでは四年間に対する時間の観念が余りにも違い過ぎて一層悲しがらせるだけだった。
「しょうがねえなあ、何だってあんないい先生を追い出してしまっただがな」
あまりにも子供らしくない悲しがりように母親はもうなだめる術もなくて溜息をつくばかりだった
「貞兄は木村先生が本校の先生になった方がいいことが一つあると思うよ」
「……」

わざと声を元気づけて言う貞兄の言葉にも乗って来ない
「それはなほれ雪子の誕生日にだよ本校の先生だったら大威張りでよべるじゃあねえか」
「そうだそうだ　そん時にはおこわとうどんとこせえて木村先生を呼ぶべえよ」
「八月二十八日は未だ夏休みだから朝から来てもらって泊ってって貰うべえ」
「その頃にゃあ秋蚕も上って暇になるし前の日にかじか（谷川にむく頭の大きい小魚）取りをしてうどんのだしにしてな」
母と兄は雪子の誕生日が楽しみでならない様に話している。その話にやっと乗って来た雪子は
「よんだって来てくれなきゃあどうするだい」
いつまでも分教場にいてくれるといつも言っていられたくせに雪子が一年生になるのも待たないで本校へ行ってしまはれたという裏切りは学令に達したばかりの子に疑うことを知らせたのだった
「来てくれるとも」
貞兄が自信を以て答えた
「心配だったら手紙をかいて今から約束しといてもらえばいい」
そこで雪子は貞兄に教えてもらって片仮名の手紙を書いて本校へ行く貞兄に頼んだ。木村先生からはすぐ返事が来た

ユキコチャン　オヤクソクヲヤブッテゴメンナサイ。イロイロユキコチャンニハマダワカラナイワケガアルノデス
オタンジョウビニハキットイキマス　ナニカトッテモイイモノヲオイワイニアゲタイトイマカラカンガエテイルノデス
ダカラナイテガッコウヲオヤスミシタリシテハイケマセン。ナツヤスミマデヤスマズガッコウヘイカレタラオヨバレニイクトヤクソクシマショウ　コンドコソウソハツキマセン。
サヨウナラ

ユキコチャンヘ
片仮名で書いてある手紙は雪子にも読めた。何回も何べんも読んだ。貞兄にも読ませてあげた。お父さんにもお母さんにも読んで聞かせた。翌日から機嫌よく学校へ行くようになった雪子はお誕生日の事だけを考えて楽しんでいるらしく一人で留守番をしている時でも運動場の片隅ででも何かを思い出してはにこ〳〵としていることがあった。

春から夏へ――鮮やかな新緑から次第に深い緑へと谷間の村は季節の衣を美しく着こなして落着きのある粧をこらしつゝ大自然のカンバスを色どって行った。けれど村人はその巧妙な絵筆を眺める暇もなく種蒔きに苗取りに養蚕にと眠る時間も惜んで働いたのだ。
麦と□□の取入れが終って秋蚕片付く八月末から九月初旬までの半月ばかりの間に一息入れて又麦蒔きや秋の取入れがはじまるのである
「やれ〳〵やっと一段落か」
炎天下もいとはず不眠不休の労働を続けて来た人々がほっとする頃山村にはもう朝晩涼風がたって夜毎に泣く虫の声が秋の訪れを告げるのだった
「わけもなく雪子の誕生日が来ちまったなあ」
お母さんは夏の忙しい間にも虫につかれない様にと何回も干して保存して来た□米を洗い乍ら忙しくて夢中で過して来た日を思い出す様に言った。貞治と雪子は今川からとって来たかじかを竹串にさしていろりの火で焼いている。お父さんは日本紙に筆でかいた活け花の本を長持の中から探し出して来て若い頃祖父さんに教えられた枝のため方を思い出し乍ら山から折って来たハゼを床の間に活けている。雪子はわく〳〵する程嬉しかった。ずい分待ち遠しかったけれど今になってみるともう二、三日待ってもいい、その方が楽しい様な気もするのだった。養蚕の期間中積み上げてあった畳も敷いてお座敷をつくった。
「雪子明日だな　嬉しいか」
「うん　一つだけ寝ればいいだな」
親も子も午後からは一切の仕事を止めて明日の珍客を迎える準備に大童である
「風呂がわいたら今日は雪子が一番先に入ってきれいになるだよ」
黒く煤けた風呂場の窓からは旧暦十日過ぎの澄んだ月が眺められた

「まあ先生よくおいでて下さいました。朝から子供がどれ程お待ち申しただがな、さあさあ」
とお母さんは昼近くなってやっと姿を見せた先生を愛想よく迎え入れた
「遠くから来ていただいても何もねえけれどまあこっちへ」と父親も座敷へ招いた。
貞治と雪子はあれ程待っていたのに先生を見ると恥づかしそうに小さくなって
「こんちは」
と膝小僧を揃えておじぎをした
「こんにちは　雪子ちゃんおめでとう。雪子ちゃんにいいものを持って来ましたのよ。こちらへいらっしゃい」
赤いメリンスの風呂敷から先生が取出したものは萩の葉模様の単衣物だった
「まあ先生。そんな御心配をしていたゞいたんじゃあ……」
言いかけて父母の顔色は一瞬さっと血の色を失って包みきれない□□（ろうばい）に次の言葉を続けることが出来なかった。
それは夢の間も忘れたことのない同じ模様の単衣だったのだ。いつかこんなことになる日が来るに違いないとは思っていた。然し日毎に可愛さを増してゆく雪子への愛情はその日の来ることを恐れてもいたのだ。いやもうどの様なことがあっても雪子を手離すことなどは出来ないと思えば尚のこと他人の子供を我が子と偽（いつは）って育てている罪の意識は日と共に深く両親の心を苦しめている此の頃だったのだ。

それはも（ママ）三十年余りも前の話に戻さなければならない。
貞治の父親は近在に知られた酒造屋の家に生れて何不自由なく育てられたのだけれど母親が嫁に来た頃には相当傾いていたのだという。然し派手に暮して来た祖父には急に経費を縮めることが出来ず、その祖父が長く病いもせずぽっくりと亡くなった後には予想外の借財だけが残されたのだった。それは半年しか働くことの出来ない此の山村でどんなに働いても返済することなど出来ない程の額だったのである。祖先伝来の家屋敷まで手離すことは身を切られる程辛いことだったけれど此のまゝ大きな家に住んでいたら急に交際費を縮めることも出来ず動きがとれなくなってしまうだけだと思って総ての財産を投げ出して借財の整理をすると子供のないことを幸に逃げる様に村を出た夫婦は織物の町K市へ落着いたのだった。失敗したらどんな事でもして生きて行こうと覚悟すると僅かな持ち金全部を出して支入れた織物を持って近郷の農家を売って歩いたのだ。身を落せば落す程世の中は暮し易く生きられるものであることをはじめて知ったのである。食べて行くことだけが精一ぱいの生活の時には村への消息さえも忘れていたけれど五年過ぎ十年経って精神的にも経済的にも多少でもゆとりが出来て来ると山深い古里のことが想はれた。祖先の墓へ詣ることもなくたゞ生活に追はれて過して来たことが申訳なく昔のまゝの土地や家などは到底望めなくてもその何分の一でもいいから買い戻して老後は郷里の土を耕して暮したいという一図の希望に又努力の数年が過ぎて年と共に耕地や山林を再び自分のものとして手に入れることが出来た。十五年目の春夫婦の間には男の子が生れた。その子が貞治である。諦らめ切っていただけにその喜びは大きかったどっ（ママ）と押し寄せた幸福に戸まどいする程だったのである。けれど貞治が数へ年四つになった六月重い疫痢（えきり）を患い奇績（きせき）的に命だけは取りとめたのだったが其の後がいけなかった。衰弱しきった体を一日も早く回復させようと思って食べさせればすぐお腹を悪くする、熱を出す、歩くことも出来なくなって時々強いひきつけを起しては両親を驚かせるのだった。此の子供さえ丈夫に育ったら二十年近い年月汗と油で築いて来た総てのものが崩れ去っても惜しまないからと夫婦は不眠の看護を続けたのだがはか〴〵しくいかなかった。その時東京の青山に子供の病気になら何にでも効く家伝薬があるということを聞いた父親はとぶ様にして上京して来たのだった。いいという事ならどんなことでもして見ようという藁をも掴む気持だったのである。上野へ着いた時には既に正午近かったのだけれど昼食をとる時間さえも惜しまれる程はやる気持で地理に暗い東京の街を尋ね歩いている時ぐら〴〵と襲って来たのがあの大正十二年九月一日の関東大震災だったのである
一瞬にして恐怖の港（ママ）と化した街の中に立ち乍らもやつれ果てた病児を思って何とか探しあてて薬を手に入れたいと狂った様にさまよい歩いたけれど逃げ惑う人達に道を聞いても要領が得られず、その中に其処此処にあがった火の

手に追はれてとてももう駄目だと諦らめた父親は仕方なく又上野駅の方向へととって返し何処をどう歩いたのか自分でもわからぬままに人波に流されて辿り着いたのが上野の池の端だった。後から後から押して来る人の群の恐ろしい力は何も持たない身一つの男の力をもってしても抗しきれない程に強くつぶされたら最後なだれを打って倒れて来る圧力の為に□□死した人もどれ程あったか知れない。此の世の地□絵そのままの人垣の中から火のつく様な赤ん坊の泣き声を聞いて思はずその子を母親の背から抱きとると必死の力で逃れ出たのだった。ほっとした時には我が子の事が案じられて歩いてでもいいから一刻も早く帰らなければと思うと助けた赤ん坊の処置に困った。母親は赤ん坊だけは誰かが助けてくれたと思った瞬間闘う力もなくなって人垣の中に倒れてしまったのかも知れない。夢中だったからその母親がどんな人であったかなど勿論わからなかった。呼んでも呼んでも母親は現れないし訳を話して誰かに□かって貰はうとしても聞いてくれる人もなかった。

「いいわ仕方がないしばらく予かっていればその中探しに来るだろう」。思い迷っていられる時ではなかったから生後二、三カ月しか経っていないその赤ん坊を自分でしめていた帯を解いて背負うと汽車の出るのも待たず帰り道についた

俄に二人の子持ちになった家の中は大さわぎだったけれど赤ん坊は人工栄養でもお腹一つこわさずよく飲んでよく眠るので大して手はかからなかった。貞治も九月の中旬あたりから次第に元気になって来た。気候がよくなって来た為でもあったろう。そうなると子供は回復が早くて三カ月振りに初めて愁眉を開くことが出来たのだった

「お父っあんが人助けをして来たから神様が貞治にも命拾いをさせて下さっただ」

「此の子も早く親許を探してお返ししないと罰が当る」

夫婦はそう言って警察へもお願いしたけれどすぐにはわからなかった。

「俺が助けなければ死んでしまったかも知れない子なんだから俺に授かった子かも知れない。それなら自分の子だと思って大事に育てよう」

夫婦はそう思う様になった。雪の様に色の白い肌のきれいな子だったので雪子と命名して日頃信心している不動様の縁日を誕生日にして貞治の妹として戸籍がつくられたのだった。其の年の暮に親子四人は郷里の村へ帰って来た。貞治は自分が入院している間に生れた妹だと思って可愛がっている。交通の不便さが幸して村人も雪子の生いたちを知る人はいなかった。けれども何処かにこんな可愛い子供を探し続けている人があるのではないかと考える度に夫婦は暗い責められている様な気持になっている此の頃だったのだ

「大体見当をつけて揚げをして来たんですけれどちょうど良くてよかったわ」

初めて袂の長い着物を着せられた雪子ははにかみ乍らも嬉しそうに両手を拡げて歩いたり、袂を重ねて座ったりしているのを見乍ら木村先生も嬉しそうにしていた。

「雪子鏡を見てみろ、ほれな」

貞治は母の古い手鏡を持って来て縁側へ出るときれいになった雪子の全身をその小さな鏡の中へ写してやりたくて苦心している。そんな兄妹の方を向いたまゝで木村先生は語り続けたのだった。

「私ね　此の着物だけは何より大事にしておいたんですの。震災の時神田までお使いに出たまま行方不明になった母がおんぶしていた妹がこれと同じ単衣を着ていた筈でした。私はこれを着て父と一諸に逃げましたので此の着物だけが残ったわけなんです。たった一つの母の片身になりましたので嫁に来る時も持って来たのですけれど雪子ちゃんは何だか妹の様な気がしてなりませんので着ていたゞけたらと思って……。妹も生きていたらやっぱり今年一年生になっていた筈です。でも母がいなくて若し妹だけ残ったとしたらとても可哀想でしたから諦らめましたの……」

両親は黙って□くだけで何とも返事のしてみようがなかった。あの日に雪子が着ていた単衣は一度も出したこともなくつづらの底にしまってある。思い切って打ち明けてしまいたかったけれどその勇気もなかった。自然にわかる日までは黙って我が子として育てたかった。その方がみんなが幸福だと思いたかった。

「あら嬉しい日にこんなお話をしてしまって、誰にもこんな話をしたことはなかったんですけれど」

三人の大人は子供に気付かれない様にそっと涙をふくと笑顔をつくってみん

なで祝の□(ぜん)についた

運動会

村の秋は十一月三日を境にして季節のバトンを冬へ渡さなければならないのである。それだから取入れも蒔き付けもこの日までに一応終らせることにもなっている。明治節にもなっている此の日には四つの分教場の子供も全部本校へ集って祝賀式を挙げた後で秋の日の最後を飾る大運動会が運動場一ぱいにくりひろげられる日でもある。

「運動会までにゃあおやさなくっちゃあなんねえよ」おかみさん達はそう言っては小さな子供までも働き手の中へ入れて秋の仕事を一つずつ片付けて行く。それまでに一応の区切りがつけられなかったら「あすこじゃあのろまだからさ」という□(らく)印をおされてしまう恐れもあるし十一月三日を過ぎたら何時雪が降って来るかも知れないというのが此の村の初雪の統計でもあったから若し早い雪に見舞はれたらそれこそ困ってしまう。それだから真剣にならざるを得ないわけである。深い霜の道を踏んで薄暗い中から豆刈りもする夜は夕食の後十二時近くまで粟穂切りもする。土間に敷いたむしろの上へ座り込んでほの暗い電燈の下で茎に着いている粟の穂首を包丁で切り離す仕事は夜なべにすることにきまっていた。力も技術も要らない然も座っていて出来るというこの仕事は誰にでも出来るから小学校の三年にもなればみんなやらなければならないのだ

「今夜っから穂切りだよ」

そう言はれると急に宿題が気にかかる。言っても無駄だとは思っても

「おらあ宿題があるだもの」

小さい声で遠慮勝ちに言ってみるのだ。

「たあ言を言はねえもんだ本なんずべえ読んでてそれでめしが食えるか」

「一日学校で遊んで来るだけで沢山じゃあねえか夜まで遊ばいてたまるもんか」

弁当を持って学校は遊びに行くところと思っている親達だからそれ以上言葉を返したら

「そんなに勉強がでいじ(大事)だったら食はずに本を読んでいたがい。学校がよく出来たら先生が飯を食はしてくれがなどうだがな」

そう言はれるにきまっているからしぶ〳〵とむしろの上へ座る　仕事は楽なのだけれどじっと座って手だけ動かしていると昼間の疲れが出て来てどうにもならない眠気に襲はれて来るのである。その眠さに耐えることの方が仕事をすることよりもどれ程辛いか知れない。こらえ様として努めて大きく眼を開き忙しく手を動かして見るのだが知らない中に大きく舟を漕ぐ姿が影法師になって土間の障子に映されるとさすがに可哀想になった母親は

「それそれ、ねぶったくっても今ちっとがまんしてやるだよ運動会までに終らなけりゃあ見に行ってやれねえじゃあねえか　おらが家だけ行かれなくってもいいだか」

それは困るから又眼をこすっては切る。夜食のさつまいもがふける頃やっと眼がさめて一日の労働から解放されるのだ。

夜なべの眠さが辛いだけ運動会の嬉しさは倍加される。前の日ぎりぎりまでかかってどうやら大きい物だけは片付き小豆位は末(ママ)だ畑に残るというのが普通なのだけれどお天気都合でもよくて二、三日も前に終っていたら其の喜びは又格別なものがある。他の家が末(ママ)だ夢中で稲こきでもしていたら尚更である。貞治と雪子はその気分を味はえる二、三日を作りたい為に此の秋も夢中で働きよく手伝った貞(ママ)治は高等小学校を卒えて三年目の秋を迎え体格も大きく骨組みもガッチリと立派な若者に成長していたし雪子も高等科の一年になってお母さんを追い越す程背丈も伸びた。お父さんは殆んど百姓は手伝はないしお母さんは此の二、三年急に弱って床に就くことが多くなっていたから総べての仕事は兄妹の手で進められている此の頃だった

「おっ母だって今っからこんなことじゃあしょうがねえもの秋のうちぐれえがまんしてやらねえばなあ」

いくら働いても疲れを知らない程丈夫だった筈なのにと自分の体を励ます様に言い乍ら重く痛むらしい頭をかかえて起き出すとノーシンを一服呑んで野良着に着替えようとする

「おっ母無理しなくってもいいよ」

「二人で出来るから安心していらっしゃい」

兄妹は無理やり母親を休ませようとする

「そんなことを言ったって雪子は学校だし貞が一人でしてたんじゃあ終らねえ中に雪が降って来ちまうが」休んでいても心配でならない様子なのだ。兄妹は顔を見合はせて言ってしまうかと言った様な眼くばせをして

「おっ母心配しなくったってちゃあーんと予定表がつくってあるだから」

座敷の机の引出しから取出して来た卦紙には十月はじめに働き手は二人だけという考えで作った一ヶ月の予定が組まれているのだ。

十月一日――五日　堆肥運び
十月六日――八日　さつまいも堀(ママ)りと麦畑の準備
九日――十二日　麦蒔き
十三日――十五日　粟刈り
十五日――十八日　豆刈り　夜なべに粟穂切り
十八日――二十日　粟こなし
二十一日――二十三日稲(ママ)刈り

その予定は少しのゆとりもない厳しいものだったから雨が降るからなどと言って一日だって休んでいたらそれだけ狂ってしまうことになるボヤボヤしていることは出来なかった。然も一日の大半を学校で暮さなければならない雪子は少しでも貞兄の負担を軽くする為には朝晩の僅かな時間を有効に使うこと以外にないのである。そこで雪子は朝四時が打つと誰にも気付かれない様にそっと起き出して桶に入れた堆肥を背負って走る様に忙しい足どりで麦畑へ置いてくる。貞兄が眠っている間に一回でも多く運びたいと思うといくら急いでも尚足りない思いである。段々畑へ登る道は末(ママ)だ暗いけれどやがて夜が明けると思うから少しも怖くはなかった。村中が末(ママ)だ深い眠りの中にある時自分だけが働いているそう思うと雪子の心は得意さに躍った　二回目も音をさせない様に堆肥をつめていると眼をこすり乍ら貞兄が起きて来た。それでももう野良着に着替えている。

「雪子早えなあ　ちっとも知らなかった」

「シッ　でっけえ声を出すなよお父っさんもおっ母も眼を覚ましちまうじゃあねえか」

二人は声を落してひそ〳〵と話す

「おっ母なんかまあだねむってた?」

「うんおれ達が起きてるの知らねえらしいぞ」

「そう　おもしれえな(ママ)」

「朝めしまでに五回は歩けるかな」

行きは重い上に登り坂だから口もきけないけれど帰り路は楽しい。まだ星の光の消えきらない空を仰ぎ乍ら兄妹は声を揃えて合唱する声(ママ)には頗る自信の強い貞治は

「こんだ雪子は黙ってろ貞兄が一人で歌うからな」

月なきみ空にきらめく光
ああその星影　希望の姿

朝のしじまを破って秋の山にこだまする自分の声に貞兄自身もうっとりと耳を傾け乍ら更に続けて歌う。

言いつけられて追い廻はされる様にさせられる仕事は辛く感じられるけれど自分でたてた予定表に基づいて自主的に進めていく仕事には楽しいはりがあって朝起きも夜なべも少しも重荷ではなかった。兄妹は常にいたはり合い乍ら仲よく嬉しそうに働いている。

「運動会を一区切りに仕事を片付けて冬を迎えるなんて誰が考えたか知らねえけどいいことだと思うよ」

「うん本当だ。だからおらあ運動会そのものは嫌いだったけどやっぱりその日は嬉しかったものな」

「そうそう　貞兄は運動会が嫌いだったっけな」

二人は坂道を駈け下り乍ら笑い出した

それはもう三年前になる。貞治は小さい時から非常に不器用で工作と体操はいつも乙だった。いくら努力してもどうしても出来ないのが空中転廻と鉄棒の逆上りなのである。高等科の二年になると運動会の日に観衆の前で一人一人その空中転廻と逆上りをやらなければならないことになったのには何より困ってしまった　出来ないのは貞治と眼の悪いK君の二人きりなのだったから体に何の欠□(かん)もない貞治だけは何とかやらなかったら並いる人達からどっと笑はれる事はわかりきっている。そこで夜暗くなってから分教場の庭へ練習にも行ったけれど出来そうにもない。こんなことではと思って考えたのがならぬ時の神頼みで神棚の前へ行くと貞治はそっと誓ったのである。

「神様　おらあ三七二十一日の間さんまを食いませんからどうか運動会までに転廻が出来る様にさせて下さい　一生懸命練習しますから」
その夜ジリ〳〵とさんまの干物を焼く煙が台所一ぱいにただよって貞治の食欲はそそられたのだけれど
「おっ母　おらあさんまは食はねえよ」
「あれ　なじゃやい」
「腹が痛いから食いたくねえだもの」
「腹が痛い？　そいじゃあ薬でも飲まざあなんめえよ」
「いいだよ　さんませえ食はなきゃあ治るだから」
皆が食べてもがまんして食べなかった。翌日も食べないので母親はおかしいと思い出したのである。谷間の村では一年中で魚を食べることは年に三回だけと限られている。正月に鮭一尾、田植の時にみがきにしん一輪、そして秋の取入れ時に食べる塩さんま。鮭よりもにしんよりもさんまの好きな貞治だった
「二人がよく稼ぐからお父っあんが買って来てくれたのに貞は何だって食はねえだ」
「だって食いたくねえだもの」
「あれ程好きだったものが急に食いたくなくなるなんちゅう話があるもんか　あんまりへそ曲りな事を言うもんじゃあねえよ」
少し怒った様に言い乍ら母親はおいしそうに焼けたさんまの尾っぽの方を貞治の小皿へのせてやった。食べたいのは山々だけれど絶対に食べるわけにはいかないのだ。貞治は自分の不器用さが悲しくなってそれ以上は何も言えずこらえていた涙が一つポツンと膝の上に落ちた。そして問いつめられて食べないわけを泣きじゃくり乍ら話して聞かせたのだった
「困ったなあ　そんなにむづかしいことを先生は何だってさせるだがな」
母親は□息をついた
「むづかしくなんかねえだよ　どんなに頭の悪い子にだってみんな出来るだもの」
雪子はそんな貞兄が可哀想でならなかった
「さんまはみんなで食うのをよすべえ　そうして出来ます様にって拝んでやるべえ」
父と母にも同意を求める様に兄を励ます雪子も涙声になっていた
お父さんは庭の片隅を堀り返してやわらかく土をほぐし
「おっかながっていたんじゃあ何時になっても出来ねえぞ　お父っあんがついててやるから思い切ってやってみろ」
親切な先生になって練習させてくれたのだった　そんな努力が報いられてか当日はどうやら形だけは出来て笑い物にされずに済んだのである
その時の事を思い出して笑い出したのだけれど笑い乍ら涙がにじんで来て困った　見られまいとしてどんどん走り出した雪子の背中で空っぽの桶が右に左にゆれていた。

秋の空澄み菊の香高き
今日の佳き日を皆寿ぎて

本校帰りの女の子が五、六人連れ立って歌い乍ら通って行った。
「おらああの歌を聞く時季が一番好きだなあ」
予定よりは三日も早く昨日ですっかり取入れをすませた貞治は遠ざかって行くメロデーを追う様に口ずさんでいる　今日は□□と物置を片付けて豆がらや粟がらを積みこんでいたのだった。春の種蒔きから秋の取入れまで苦闘の半年に一区切りをつけてくれるのが明治節のあの奉祝唱歌だったから物心ついてから来る年も来る年もそうした生活を繰り返し乍ら成長して来た貞治にはその歌声を耳にすると「あゝよかったこれで此の冬も無事に暮せるという喜びと力の限り働いて来た我と我が身をいとおしみたい様な気持にさせられるのだった。歌ってどんな歌でも色々なことを思い出させたり考えさせたり励ましたり慰めたりもしてくれるいいもんだな、大人になったらうんと働いてオルガンを買いたい、そして雪子に弾かせて家中で唱ったらもっと楽しく働けるだろう。考えただけでも楽しかった
「雪子はまあだ帰らねえけどいつもより遅いようだな」
台所口から顔を出した母親の声に我に帰った貞治は
「ああ今日は安心して何か先生の手伝いでもしてるだよ」
「そうか　日が暮れると此の頃は急に寒くなるから風邪でもひいちゃあなん

ねえと思ってさ」
「雪子よりおっ母こそ風邪をひかねえ様にしてくだいよ　寝こんじまって運動会見に行かれねえなんていうことになると雪子ががっかりするよ」
日中の暖かさは忘れた様に朝晩の冷え込みが強い此の頃なのでここ数日機嫌よく起きている母の体をこそ案じるのだった。
「うわさをすれば何とやらっていうけど、ほらあすこを来るのは雪子だよ」
「ほんに墓場の下の道を来るのは雪子らしいな」
「何かあったんかな。馬鹿に元気がなさそうだぞ」
黄昏近い夕方の道を急ぎもせずに□向いて歩いて来る雪子は我が家の見える曲り角へ出たことも忘れて何事か深く考え込んでいる様子である。平常の雪子だったら家が見えた途端に鞄をおさえて筆箱をならし乍ら走り出すのだったのに。そんな時
「走って来なくったってよさそうなもんだのに」と母親が笑えば、
「そいだっておらあ　早く家へ来て今日のこと話してえだもの」
そう言って呼吸をはずませ乍ら一日の出来事を大小もらさず話す子なのである。歴史の授業で聞いて来た話から体操の時間の先生の号令まで真似る。そして此の頃ではその日の出来事について仲々鋭い批判もし論理ずけもして貞兄の意見を聞くのだった
「行って参りました」
元気のない声でそれだけ言うと鞄を肩からはずし乍ら座敷へ上って行こうとする。
「雪は頭でも痛えんじゃあねえか。馬鹿に元気がねえぞ」
「誰かと喧嘩でもしたんか」
母と兄とはたたみかけて聞いた。
「どっちでもねえけどさ、おらあとってもつまんねえ」
そう言い乍ら雪子はヘタ〳〵と崩れる様に上り口の板の間へ座ってしまうと両足を長く投げ出して其の膝の上へ鞄をのせた
「何がそんなにつまんねえことになっただ」
土間へ立っていた母と兄も上り□へ腰を下してその訳を言ってみろと□す様に雪子の顔を覗き込んだ
「そいだって日傘のゆうぎが出来なくなっちまっただもの」
雪子達高等科の女生徒は此の秋の運動会には絵日傘を持った唱歌遊ぎをすることになって張り切って練習していたのだった。遊ぎの指導は女の先生がなさることになっていたので男の先生が担任している学級は三人の女の先生がそれ〴〵受持つことになって高等科は木村先生の担当になったのだった。木村先生はずっと毎年二年生の受持ちだったから雪子は本校へ行く様になってからも直接教えていただく事は今度の運動会の為のお遊ぎがはじめてだったから其の張り切り方は又一層だった筈である。練習中は持ったつもりの空の手でお稽古していたのだけれど昨日の総ざらいに初めて手に持って秋の運動場へ絵日傘模様を描いたのだった。
「そりゃあ又どうゆうわけで出来なくなっただやい」
雪子が語るその理由とはこういうことだったのである
何処の学校でもそうである様に運動会の日より一週間前に当日そのままのプログラムから個人競争だけを除いた全種目にわたって予行演習が行はれたのが昨日だった。午後までかかって全部終了し反省会の為の職員会が始められたのは午後三時少し廻ってからであった。此の日の職員会は例年行はれているのだけれどプログラムに従って指導者の説明があり演技其の他についての意見を出し合って議事は進められて行くのだったが殆んど「結構です」「別に意見はございません」という型通りの反省会に終るのが普通だったから一時間余りで散会になるのが常だった。此の日も会議はすら〳〵と運んで児童の演技としては一番最後の絵日傘まで進められた時司会者の教頭先生は
「それでは最後のゆうぎ絵日傘へ移ります」
と指導者の説明をうながした。木村先生は静に椅子を立つと一礼して
「申上げます。初めにこうした題材を選びました理由から申上げますと、国の内外は誠に風雲急で非常時の呼び声も高い時にこうした教材を選ぶとは以ての外だとのお叱りを受けるかと再三考えもし□□も致しましたが、どの学年の題材を眺めましても総べて軍事色豊な物ばかりの様に見受けられましたので一つ位は全く異った色のものもあった方がかえって全体の調和もとれるのではないかと思いましたし、気分の上からも緊張したものばかりでなく何かほっと息抜きの出来るものもあってもよいのではないかと考えまして此の

教材を取り上げました。日傘は持っていない子供の方が半数以上ありましたけれど下の学年の人達からお借りすることが出来ましたので新しく買うという事はしないですみました。日傘を持ちましたのは今日が初めてでしたのでこなしきれない風でございましたが残る練習期間に充分馴れさせたいと思っています」。

一通りの説明を終って木村先生が座に就くと

「それではこの種目についての御意見或は御質問がございましたら」司会者が言い終るのを待っていた様に

「はい」

げんこつの手を挙げたのは今年の三月師範学校を卒業すると引き続き短期現役の為に五ヶ月間の軍隊生活をされて九月の二学期から本校へ赴任した吉岡先生だった。新卒であり然も未だ二ヶ月の教壇生活しか経験されない人ではあっても代用教員の多い此の村の職員室では中堅の地位を占め七年余りの経験を持つ木村先生より勿論上席だった。

一時間余り単調ないつの年も変りない型通りの会議が進められて来た後だけに此の青年教師が何を言い出すかと興味の眼は一斉に吉岡先生の上に注がれた。

「ええ　指導者の木村先生にお尋ね致します先生はあの絵日傘が観衆へ及ぼす心理的影響を一応お考えになられてあの教材を選ばれたのでしょうか？派手な色彩というものには凡そ縁の遠い村の人達があのゆうぎを見た時若い娘は土に親しむことを忘れ、青年達の間には遊惰の気風が流れる結果になりはしないかと私は心配するものであります」

末だ抜けきらない軍隊口調で稍々興奮の面持ちでそう述べた。木村先生はぐっと深く息を吸い込んで心を落着けてから静な口調で答えた。

「吉岡先生、それは少し御心配が過ぎるのではございませんでしょうか　縁が遠いと申しましても日傘は此の村の子供自身が持っていた物なのです。夏祭りの一日には子供達がさして歩いているものですし、持つことの出来なかった子供もあの一曲を踊る間は自分の物として借り物であることを忘れています。色彩の点も此の村の親達が買い与えられたものばかりなのですからそれ程強いものはありませんし入学から退場までの時間を入れても十分足らずの時間ですから青年男女の心理にまで悪影響を及ぼす様なことはないと信じます」

「それは余りにも時局を知らない狭い視野からのお考えだと思います。世界は今絵日傘をもてあそんでいる時代ではありません。まして心身鍛錬の目的で行はれる筈の運動会にあゝした教材を取上げたということは根本的な精神を間違えているのではないかと思います。」

対立した意見は何処までいっても交るところを知らず、何時の間にやら秋の陽はとっぷりと暮れて電燈の設備のない職員室には小使いさんがつけて行ったローソクの火が□間風にゆれていた。驚いた様にズボンのポケットから大きな懐中時計を取り出し乍ら教頭先生は

「まあ色々と御意見も出ましたけれど大分時間も経過しましたしこの辺で決を取りたいと思いますが」

すると次席の武田先生はなたまめきせるをコツコツと叩き乍ら

「どうだいあんまり目立つことは止めて無難なところであの日傘だけは持たないであのまんまやられちゃあ」

と妥協点を示されたつもりであるらしい。

「でもあれから日傘を取上げてしまったら何にも意味がなくなってしまうのです。動きの小さい振り付けですから少しも栄えなくなるのです」

「まあそうでもあろうが武田先生の言はれるところがいいところじゃありませんか」

と校長先生のお声がかかったからもうそれでおしまいだった。それ以上は言はせようともせず木村先生の意図は全く無視されて「それがいいですね」「賛成です」と日傘を借りる事に協力して下さった人までがそう言って会議は終了となったのである

木村先生は家へ帰ると初めて涙が出て来て食事をする気持にもなれなかった

「夜になるまで意見を述べ合ったということだけでも大成功だよ　皆だってだん〳〵わかってくれるさ　あせっちゃあいけないね」

木村さんは静にそう言って下さった。決して感情的になって一諸に怒ったり悲しがったりしてくれない物足りなさはあったけれど、それだけに安心して何でも話すことが出来るのだった。話している中に次第に冷静さを取戻して

自然と自分の気持を立直らせることも出来た。
翌朝は努めて明るい顔で出勤されたのだけれど放課後まで練習する気持にはなれなかった高等科の女生徒を自分の教室へ集めると
「日傘は持たない方が持たない方がいいという先生方のお考えで持たない事になりましたけれど昨日一度持って見たのですから当日も持ったつもりで出来るだけ動作を大きくやって見ましょう。先生は着物の裾廻し一つ買うにでも表の地色としっくり調和するものでなければ決して買はないという主義ですので、今年の運動会も一つ位は兵隊さんに関係のないものを取り入れて全体の調和の上に安定した感じを持たせたくて絵日傘を選んだのですが、曲だけでもその目的の何分の一かを果すことが出来ると思いますから大きな声で歌い乍らやりましょうね」
先生は小さなオルガンを教室の隅から真中まで持出して弾き乍ら子供と一諸に歌っていた

れんげを摘もかすみれを摘もか
春の小川の板橋トント
トントン渡れば花が散る

声量の豊な先生の声は子供の声と一諸になって教室の窓から秋の空へと流れていった。

待ちわびた十一月三日は快晴に恵まれて運動会は繰りひろげられた　年寄りも若者も秋の最後を飾る一日を楽しもうと集い寄った中でプログラムは順調に進み絵日傘のゆうぎも持たないままで無事にすんだ。五十人の女生徒の母親だけは見ている中に我が子の手に美しい絵日傘を持たせた様な□覚にとらはれ乍ら
「よく出来たことが」と眼を細めて退場してゆく女生徒の後へ拍手をおくっていた。勿論貞治とその父母も。

母の死

「雪子、足が冷たかねえか」
「うん、そんなでもねえ、心配しなくってもいいよ」

畠の雪は消えたけれど山々の峯には末だ白いものが残っていて其処から吹いて来る風は冷たく雪の下から顔を出したばかりの麦畠の上を吹いて通った。一人前に毎日畠に出る貞兄は地下足袋を履いているけれど学校へ行く片手間に手伝う雪子には末だそれがなかったから畠の端へ藁草履をぬぎ捨てると素足のままで小刻みに足を運んで芽吹いたばかりの麦を踏んでいる。半年の間土を離れて足袋に包まれていた白い足の裏を軟かい麦の感触は冷たくくすぐって土の冷たさと風の冷たさに見る見る足の甲までも真っ赤になったのを貞治は見ていられなくなって
「貞兄のを貸してやるよ。ちっと大けえけど大丈夫だよ。はいてみな」
そう言い乍ら地下足袋のコハゼをはずしにかかった兄の方を見向きもしないで
「冷たい方が嬉しいだよ　いいだったら」
不機嫌に言い放った雪子は感覚を失ってしまっている足の冷たさなど考えてはいなかった緑の縞模様の細い道を行っては戻るその足の運びにまで深い悲しみと不安と誰にでもない憤りが渦巻いていた。そんな妹の表情をいぶかり乍らもコハゼを又掛け直した貞治は
「今年は何時までも山の雪が消えねえから風が冷ていだな」
足の運びは続けたままで両手を後に組んで山の雪を眺め乍らつぶやいた。
「貞兄は雪が消えた方がいいんかや？雪が消えちゃったらおっ母を何で冷やしてやればいいと思うだや」
「……」
「おっ母は、おっ母は……死んじゃうかも知れねえだで……」
こらえにこらえていたことを吐き出す様に言ってしまうとくずれる様に土の上に座って声を出して泣きじゃくってしまった雪子。その側に腰を下して黙って妹の泣き止むのを待つ様に遠い山の一角をじっと見つめている貞治の大きく見開いた眼からも大粒の涙がポロポロと頬を伝って膝をかかえている手の甲に落ちた
「死にゃあしねえよ……死ぬもんか」
妹の不安をかき消す様に力強く言ったつもりだったのに其の声も涙声になりそうで終りの方は言葉にならなかった。

　お母さんは昨年の運動会の日にひいてしまった風邪がもとでとう〳〵起き上れなくなってしまったのだった。
「日のある中に帰って来ればよかっただけえど雪子の踊りが見てえと思ってな遂晩方まで見てたもんだから」
そう言って寒気がするからと夕食も食べずに寝てしまったのだった。二、三日したら起きられるから四、五日したらと言い乍らも十日経ち二十日過ぎても起き出せなくて暮も正月も床の中で迎えたのだった。我慢強い母が何も彼も眼をつぶって寝ているのはよくよくのことだと思った兄妹が
「おっ母医者に診てもらうべえ」
と進(ママ)めても
「あんまり人騒がせをしてもな笑はいるからさ、あっちはねえ（心配はない）ぬっくなればなおるから」
そう言って聞き入れなかった。此の村に医者はなかった。峠を越した隣の村の医者を頼む時は病み疲れた人の臨終の時ときまっていたのである。いやもうその臨終にさえも間に合はなくて息を引き取ってしまったところへ駈けつけることの方が多かった。そして其の場で死亡診断書を書いて行くのである　診断書を貰うためにだけ診察を乞うのだと言ってもよかった。それだから医者が見えたと聞くと
「それじゃああの人もとう〳〵助からねえだな」
村人はそう言って大あわてで片栗粉や砂糖などを持ってお見舞に行くのだった。そう思はれて見舞いに来られたりする事を考えるとお母さんはいやだったのだ
「医者どんていうのは病気が悪くならねえ中に診てもらって病気を治してもらう人なんだよ。診断書を書いてもろう人じゃあねえだ」
「そんな事を言ったってな。うんと取らいるからさ」
「取らいたっていいじゃあねえかい。早く治って又稼げばいいだよ」
「金なんちゅうもんは稼いだからってたまるもんじゃあねえだよ　一生懸命やっとためたのを医者どんなんずに払っちまったら貞が運送屋を始めるったって貨物自動車なんか買えなくなってしもうじゃあねえか」
貞治は来春から運送屋の助手になって運転手の免状をとり自分で運送屋を始めるということで此の村に新道が開けた時からその日の為の資金として乏しい生活の中から郵便貯金をはじめていたのである。
「買えねえ時にゃあ山を売ればいいじゃあねえかい」
「先祖様から貰った山はやたらに売れるもんじゃあねえだよ　売りたくねえから苦労しているだからな」
一度は売り尽くしてしまった山のその何分の一にも足りないものを買い戻す為に二十年もの長い間旅の空でして来た苦労を思うと何で軽々しくそんなことが出来ようか。
母と子のそんな言葉のやりとりをいろり端で聞いていた父は思案に暮れた様子だったけれど
「貞、医者どんを迎いに行って来うやい」
と声を掛けた。金の心配や世間への気兼ねなどしている時ではない。どうしても治ってもらはなければ困るし、さんざんに苦労をさせたままで若しもの事でもあったらと思ったらもう考えている時ではないと思ったからだ。
「はい、行って来るよ」
はじかれた様に立ち上るとマントを着乍ら門口を出て行く貞治を母親ももう止めはしなかった。医者に来てもらって薬を飲んだら薄皮をはぐ様に快方に向うだろうと希望をかけて来診を待つ風だった。貞治は役場へ行って其処から隣村まで電話を掛けてもらった。夕方になってやっと来てくれた医師の診察の結果は体中もう何処と言うところはない程悪いけれど□□(じんぞう)が一番弱っているから一度専門医の診察を受けた方がいいと思う。そうして手術して一つ取り除けばいいと思うからと言うことだった。T市まで出て専門医院へ入院して手術する。そんなことは考えて見ただけでも恐ろしいことだった
「おっ母手術だってちっとも痛かあねえだって言うよ。そいだから思い切って入院して早く治って来てくだい」
そう言って貞治は毎日すすめた。
「それじゃあ彼岸でも過ぎてぬっくなったら行って見ることにすべえよ」
やっと其の覚悟がついてくれたのかと思ったけれど病人は春が来たら暖くなったらそんな処へ行かなくても気持よくなるのではないかと考えたからだった。三月の声を聞いて寒さはぐっとやわらいだけれどやっぱりお母さん

の体は思はしくなかった。仕方なしに彼岸明けを待って愈々出発の朝父親と兄妹は暗い中から起きて身の廻りのものを□(まと)めたりお弁当を作るなど細々と母の為に気を使うのだった。一冬をとう〳〵寝まきのままで越してしまった母親は久し振りによそ行きの着物に着替えるといくらか気分もいい様子で

「雪子飯がとてもうんまくたけたな」

そう言っていつもより食欲もあった。送って行く父親がもう靴を履いてしまってからもお母さんは神棚へお燈明をあげていつまでも手を合はせて拝んでいたが兄妹を呼ぶと

「手術なんかしたらおっ母はもう帰って来られねえかも知んねえからお父っあんの言うことを聞いて仲よくするだよ」

泣き乍ら母親はそんな事を言ったのだった。

「馬鹿なことを言はねえもんだ。出先へたって縁起でもねえ」

叱りつける様な父親の声に驚いて涙を拭き乍ら出て行ったお母さんを送り出してから兄妹は食事の後を片付けることも忘れてしまった様に黙っていろりの火を見つめたまま動かなかった。

「手術すればせい〳〵とよくなるよな」

雪子はそうあってほしいと神に祈りたい様な気持でポツリと言った。

「そうさあ、悪いところはとってしまうだもの。うんと丈夫になって帰って来られるよ」

貞治は妹の不安を打ち消してやらなければならない責任を感じて元気よく言い放っては見たけれど一年前に村長さんの奥さんがやっぱり体が悪くて町の病院で手術したのだが結果が悪くて病院で亡くなり小さな白木の箱に納められて帰って来られた事が思い出されてならなかった

不安な寂しい二、三日が過ぎてもお父さんはお帰りがなかった。手術が終ったら父親だけは一応帰宅すると言って出たのにと兄妹は毎日夕方になると門口に立って待っていた。すると五日目の夕刻両親が揃って帰って来たのである

「あーれ　おっ母もう治ったんかい」

「よかったなあ　よかったなあ」

兄妹が躍り上って喜ぶと

「手術しなくっても薬で治るそうだよ。いい薬をたんと貰って帰って来た」

父親がそう説明してくれたけれど事実はそうではなかった。手術しなければ駄目なのだけれど衰えた体力では手術に耐えられなくてかえって死を早めるだけだから病気が進まない様に薬を服み乍ら体力を養って来て下さいと医師は病人が希望を失はない様に上手に言ってくれたのだったが、神経過敏になっている病人はもう助からないのだと思い込んでしまったのである。家へ帰れた安心感もあって

「今夜はよく眠るべえ」

そう言って床に就いたのだが間もなく高い熱が出て苦しみ出したのだった。医者は毎日来て注射をして行った。食欲は全くなくなって水だけしか飲めない日が続いた。物を言うことも□□(おっくう)な様子でなされるままになって次第に衰えて行った。その母が氷枕に雪を入れて持って行ってやると

「ああいい気持」

そう言って本当に気持よさそうに眼を細めて微笑してくれるのだった。その雪ももう近い処にはなかった。遠い山の陰の凹地まで兄妹は毎日手桶を持って雪を取りに行った。そして夜中にも交替で起きては取り替えてやっていたのだった。その雪も暖い日が一週間も続いたら消えてしまうにきまっている。そうしたら母を喜ばしてやる唯一のものがなくなってしまうではないか。そうしたらお母さんは死んでしまうのではないかという恐ろしい不安が胸の中にあった　ところが今朝方往診してくれた医師が帰りがけに送り出した父の耳許へ「二、三日しか持ちますまい」という様なことをひそ〳〵と□(ささ)やいていたのを雪子は聞いたのだった。いやそれは聞き違いかも知れない。けれどお父さんに「今先生は何て言はれたんだい」と聞いてみることは怖かった貞兄(ママ)に言ってみようかと思ったのだけれど優しい兄に余計な心配をさせたくないと考えて今まで一人で悲しみにこらえて来たのだけれどもう我慢が出来なくなって麦畠の上に座ったまま泣き出してしまった雪子だったのだ。

其の翌日お母さんの息は絶えた

貞治とも雪子とも呼ばず静に息を引き取ってしまった。枕辺に集った人々に別れを告げる様に一生懸命開いていたらしい眼も閉じてしまって脈拍(はく)も全く聞かれなくなってしまった時貞治は大きな声で泣きじゃくり乍ら

「おっ母　死んじゃあ駄目だよ」
そう言って母の体に縋って繰返し母を呼んだけれど閉じられた瞼は再び開かれず握りしめている手の先から冷たくなって行った。
雪子はお父さんの後に隠れる様にして声を出さないで泣いていた。雪子こそ声を出してお母さんに取縋(すが)って泣きたかったのだ。泣いてもお母さんは帰らない人になってしまったのだけれど泣いたらいくらか救はれそうな気がしたのである。けれども貞兄に先に泣き出されてしまっては二人で泣くわけにはいかなかった。自分の悲しみはこらえてあんなに力を落している貞兄を庇(かば)ってやらなければならないと無意識の中に考えたのである。
野辺の送りが済むと家の中は大きな穴があいてしまった様に寂しく物足りなかった。どんな日でも貞治が歌はない日はない程貞治の歌声は此の家の生活にはなくてはならない伴奏であったのに母の姿のなくなった家の中にはもう十日もその歌が聞けなかった。泣くことを止めた貞治はむっつりと押し黙って思い悩まずにはいられなかったのである。貞治には母の死を単なる運命だとは考えられなかった。もっと早く医師の診察を受けて適当な手当をしていたら死にはしなかったろう。村に医者があって安易な気持で相談出来てお金の心配がもっと軽く済ませられたらたった一人の母を見殺しにしなくてすんだのだと思うと口惜しくてならなかった。然もその母が部落中で一番幸福者だと人々は言うではないか「町の病院へも行って来たのだし帰って来てからだって毎日高い注射をしてそれでも助からなかったのだからそれだけの寿命だっただよ。こんなによくして貰った人が今まで一人だっていやあしなかった倖者だった」そう言はれると余計に貞治は腹立たしかった。皆がそんな考え方だからいけないんだ病状が軽い内に診せれば助かるものをもうどうにもならなくなるまでは医者にかゝろうとしないからだ……
そんな気持を木村先生だけはよく解ってくれた
「医者にかゝればいいっていうことは誰でも知っているのよ。でもね余りにも貧乏過ぎる
（目次からは、この章にあと二枚原稿があったと考えられるが、第五章「母の死」の現存稿はここまでしかない。）

六　「春駒」の推敲過程（二）

宮川ひろの未発表草稿「春駒」の現存稿のうち、原稿用紙上部欄外に付されたページの「No.64」から「No.130」までに記された、作品第三章から五章までの本文の最終形態を前節に示した。原稿は暗い色のブルーブラックインクで記された清書稿であり、推敲は清書時と同じブルーブラックインクによるもののみと見受けられる。前稿で紹介した第一章、第二章には清書時とは異なる筆記具による推敲が認められたが、第三章から第五章までの本文にはそれが見当たらない。第三章から第五章までの推敲は、書きながら同じ筆記具で行ったもの、あるいは清書直後に同じ筆記具で行ったものであると考えられよう。あとで漢字を補おうとしてルビを振った空欄がそのまま残されていることからも、清書後に改めて原稿を見直して整えたというわけではない様子がうかがわれる。
以下にその推敲状況を示す。提示の仕方は、次のようにした。

○　前節に提示した本文の、相当する箇所のページ数・行数を示す。ページ数は、各ページの左下方または右下方に付された漢数字のものを示した。行数は、章題や行あき等も数えて示した。
○　推敲箇所の直前直後の必要最低限の本文を引用し、手入れを行っているところを括弧［　］で括って示す。括弧［　］の中には、まず清書時の最初の形態を記し、そのあとに「→」で推敲後の最終形態を示す。
○　推敲過程の提示の仕方の例を以下に示す。
・［三→四］は、最初は「三」と記していたところを、「四」に修正したことを表す。
・［（ナシ）→いたし］は、最初はなかった言葉「いたし」を、推敲時に書き加えた、という意味になる。
・［力強い→（ナシ）］は、最初は「力強い」とあったが、これを削除したことを表す。

（一）「春駒」本文第三章「誕生日」の推敲

二二頁上段13行目　お稽古して［頂→ち］ょうだい
二二頁上段14行目　教室に集めてそれ〴〵［の→に］違った
二三頁下段20行目　［計→頭］の中で計算している様子
二四頁上段3行目　風呂敷の中へ包ん［だ→で］雪の道を
二四頁上段10行目　いきなりこんな事を言［い乍ら→った。］
二五頁下段19行目　祖父さんに教えられた［（一字不明）→枝］のため方
二六頁上段25行目　母親が嫁に来た頃［から→には］相当傾いて
二六頁下段3行目　織物の町［桐生→K市］へ落着いたのだった
二六頁下段25行目　東京の街を尋ね歩いている時［あの→ぐら］〴〵と
二七頁下段8行目　初めて［着た→（ナシ）］袂の長い着物を着せられた
二七頁下段25行目　その勇気［は→も］なかった

（二）「春駒」本文第四章「運動会」の推敲

二八頁上段22行目　［さ→そ］う言はれると急に宿題が気にかかる
二八頁下段14行目　畑に残るというの［だ→が］普通なのだけれど
二八頁下段18行目　体格も［立派に→大きく］骨組みもガッチリと
二九頁上段24行目　堆肥をつめていると［（ナシ）→眼をこす］［「雪子早えな→（ナシ）］り乍ら貞兄が起きて来た
三〇頁上段20行目　少し怒った様に言［っ→い］乍ら
三〇頁上段23行目　こらえていた涙が一つポツンと膝の上に落ち［な→た］
三〇頁上段23行目　そして問いつ［け→め］られて
三〇頁下段16行目　すっかり取入れ［のすんだ→をすませ］た貞治は
三〇頁下段29行目　今日は［雪子→安心］して何か先生の手伝いでもしてる
三一頁下段4行目　三人の女の先生がそれ〴〵受持つ［て教えるという習慣だったので→ことになって］高等科は木村先生の担当になった
三二頁上段10行目　今年の［四→三］月師範学校を卒業すると
三二頁下段6行目　間違えているのではないかと思います。」［対立→（ナシ）］
三三頁上段23行目　絵日傘を持たせた様な□（さう）［角→覚］にとらはれ乍ら

なお、第四章最終ページ（原稿用紙上部欄外に付されたページの「№116」）の本文を書き終えたあとの余白に、直前の本文とは関係がないと思われる次のような鉛筆による書き込みがある。

「雪子ちゃん おめでとう」

$$\begin{array}{r} 32 \\ 17 \\ \hline 15 \end{array} \qquad \begin{array}{r} 189 \\ 117 \\ \hline 72 \end{array}$$

この書き込みのうち、上の数字に関しては、「32」は第五章「母の死」の最終ページ「№132」の下二桁、「17」は「母の死」の開始ページ「№117」の下二桁であると推察される。第五章のページ数の計算を行ったのであろう。下の数字も同様にページ数の計算式と見受けられるが、目次（前稿に提示）によると「189」は現在原稿の所在が確認できていない第七章「師範学校」の最終ページである。第五章開始から第七章終結までのページ数を確認する式といえるだろう。

（三）「春駒」本文第五章「母の死」の推敲

三三頁下段4行目　素足のままで［芽ぶいたばかりの麦の上を→（ナシ）］小刻みに足を運んで
三三頁下段6行目　軟かい麦の感触は冷たく［（ナシ）→く］すぐって
三三頁下段14行目　細い道を行っては戻［り→る］その足の運び
三三頁下段24行目　泣きじゃくって［いる→しまった］雪子
三四頁下段6行目　一度は売り尽くしてしまった山［を→の］
三四頁下段13行目　若しもの事でもあったら［（ナシ）→と］思ったら
三四頁下段16行目　マントを着乍ら門口を出て行く貞治［に→を］
三四頁下段22行目　［高崎→T市］まで出て専門医院へ入院して手術する
三五頁上段6行目　父親がもう靴を履いてしまってから［（ナシ）→も］
三五頁上段7行目　拝んでいた［けれど→が］兄妹を呼ぶと
三五頁上段20行目　妹の不安を［取り→打ち］消してやらなければならない
三五頁下段3行目　衰え［な→た］体力では手術に耐えられなくて

三六頁上段11行目　［ここ数年は病気勝ちだった →（ナシ）］どんな日でも貞治が歌はない日はない程

三六頁上段11行目　貞治の［家 → 歌声］は此の家の生活にはなくてはならない伴奏

＊

以上、本稿では、宮川ひろの未発表作品「春駒」について、前稿執筆時に確認した原稿一三三枚中の六七枚目（原稿用紙上部欄外に付されたページの「No.64」）から一三三枚目（同「No.130」）までに記された、作品第三章「誕生日」から第五章「母の死」までの本文の紹介を行うとともに、推敲状況を示した。前稿を構想した時点では、「春駒」の現存稿はこれですべてということだったが、その後、二〇二二年二月に、これまで所在が明らかではなかった「春駒」の第八章「貞治の出征」、第九章「揃いの単衣」（ただし、終り一〇枚分の原稿用紙は欠落）が宮川家で発見されている。この発見をうけて次稿（三）では、改めて現存稿の状況を確認し、新たに発見された部分の本文紹介と推敲状況の検討を行いたい。そのうえで、宮川ひろの文学の中における未発表作品「春駒」の意味について考えてみることにする。

【謝辞】宮川ひろの未発表作品「春駒」の現存稿の調査・紹介についてご許可くださり、現存稿および関連資料の確認に際して格別のご配慮を賜りました宮川健郎氏とそのご家族のご厚意に、心より感謝し御礼申し上げます。

（令和五年一月三〇日受理）

“Harukoma”：The Unpublished Work by MIYAKAWA Hiro (2)

NAKACHI Aya and OKI Yoko

Abstract

MIYAKAWA Hiro, a contemporary Japanese children's literature writer, said before the publication of her masterpiece *Harukoma no Uta*, she had repeatedly written on the same subject. This time, I had the opportunity to check the manuscript of “Harukoma”, an unpublished work that is believed to be the first work leading to *Harukoma no Uta*. This manuscript is in the custody of Mr. MIYAKAWA Takeo, son of MIYAKAWA Hiro. In this paper, I have continued from the previous article by transcribing the text of chapters 3 through 5 of “Harukoma” and clarify the process.

Key words：MIYAKAWA Hiro, Children's Literature, “Harukoma”, *Harukoma no Uta*